

巻頭言 今、福島に生活して「数学」の眼を通して回りを見る

2015年3月25日午後5時55分福島駅西口、駅の北に設置されている線量計を見る。何ヶ月ぶりかで、 $0.200\mu\text{Sv/h}$ の数値の表示。ほとんどの人は注目していないが、私は福島に来るたびに、そして線量計が設置している場所に来ると、回り込んでその数値を見る。今年になってずっと、 $0.1\cdots\mu\text{Sv/h}$ の表示しかなかったものが、今日は何があったのだろうか。そして、翌26日9時30分、同じ線量計を覗くと、 $0.180\mu\text{Sv/h}$ の数値。一日弱で、10%も変化するのかなと思う。帰りに別の場所にある線量計を覗くと、 $0.186\mu\text{Sv/h}$ の数値。ここはいつも周囲に比べて高いのだが、ここ何日かは $0.165\mu\text{Sv/h}$ 位の数値だった。やっぱり上がっている。昨日の夜は、風が吹いたか、雨が降ったのか？

小学生が、中学生が、高校生が、通学する道に設置してあるにもかかわらず、これらを自分の問題として、数値データを収集することに目を向けるようにさせる教師はいないのか？小学生でなくても、近くの幼稚園には線量計が設置され、ほとんど $0.125\mu\text{Sv/h}$ の数値を示すので、たとえ幼稚園児であれ、数値の表示の違いは、視覚的な像として判断できるだろう。小学生であれば、この数値を2つ取り上げれば、「平均を」出すこともできる。しかし、平均が等しくても、測定時間に規定される。関数や写像の考えの基礎的体験だ。数値の比較のためにこうした観察を続けていくには、一般的に条件の統一を図らなければならないことが自然と染み付いてくるだろう。朝と昼、夕方の数値の変化にも気がつくだろう。こうした、身の回りの現象に向ける目を通して、社会は、世間は、自分にとって決して「関係ない」ことではないことが実感されてくる。人が生きていく以上、他者や周囲の環境とかわつていかざるを得ない人間を意識するようになる。そうした、関係性を拒否した、無感動な、無関心な子どもを再生産していることを学校社会はいつ気付くのか？

データの取り扱いも、形式的なものではなく、まさに自分が生きることから発してくる必須の知識や技能としなければならない。そうした時代に生きている子どもに、教科書と生きた世界をつなげてみる目を子どもたちに提示していきたい。

栗原 秀幸 (福島大学人間発達文化学類)